

接続助詞「ものを」の 文脈における用法と事態の特徴

松下光宏

◆要旨

本稿では反事実条件文に接続する接続助詞「ものを」について文脈における用法と事態の特徴を次のように述べる。

1. 「PものをQ」は先行文脈とQがつながる文脈で「Pものを」が注釈的に挿入され、事実事態が望ましくない事態であるという否定的評価を示す。Qが出現しない場合はQが省略されており、「Pものを」は注釈的挿入ではなくなるが、不満足・残念な感情を印象づける表現効果を持つ。
2. Pは事実事態よりも十分に行われている事態、行き過ぎたこと／不要なことが行われていない事態を表すことが多く、Qは十分に行われていない事態、行き過ぎたこと／不要なことが行われている事態を表すことが多い。

学習者の産出という観点からは、事態の特徴についての記述がより重要なものとなる。

◆キーワード

「ものを」、「のに」、反事実条件文、
文脈における用法、事態の特徴

◆ABSTRACT

This paper reveals the usage in context and the characteristic of the event about the conjunctive particle *monoo* which connects to counterfactual conditionals. The assertion are as follows.

1. In the context in which P *monoo* Q is used, the precedent context and Q are linked. The function of P *monoo* is to annotate that the factual event is unusual/undesirable. When Q does not appear, the function of P *monoo* is not to annotate, and it has an expression effect to impress speaker's dissatisfaction/disappointment.
2. P tends to express an event that is being done more fully than the factual event, an event that is not as excessive/unnecessary as the factual event. Q tends to express an event that is not being done well enough, an event that something excessive/unnecessary is being done.

From the perspective of learner's use, the description about the characteristic of the event will be important.

◆KEY WORDS

monoo, noni, counterfactual conditionals,
usage in context, characteristics of event

The Usage in Context and the Characteristics of Event of the Conjunctive Particle *monoo*

MITSUHIRO MATSUSHITA

1 はじめに

本研究は、反事実条件文に接続する接続助詞「ものを」を対象とし^[註1]、文脈においてどのように用いられるか、そして、どのような事態を表すかといった特徴を明らかにするものである。用法については「ものを」と同じく反事実条件文に接続する接続助詞「のに」との比較をとおしてその特徴を述べ、どのような事態を表すかという点については「PものをQ」のPによく出現している語句の調査をとおしてその特徴を述べる。

従来の記述は「PものをQ」の1文のみを分析対象とし、P、Qの事態の特徴からその意味・用法を説明したものが中心で、「のに」とだいたい同じ意味」と説明されることが多い。学習者にとっては、「のに」との違いも含めて、「ものを」の特徴がまだはっきりとらえられないところもあるだろう。本研究でのより詳細な分析により日本語教育での導入に還元できる、従来よりも明解な説明を目指したい。

本稿は、以降、2節で先行研究、3節で「ものを」の使用文脈の特徴と用法、4節で「PものをQ」のP、Qが表す事態の特徴、5節でまとめ、を述べる構成となっている。

2 先行研究

従来の研究は「PものをQ」の1文のみを分析対象とし、その文が表す事態の特徴からその意味・用法を説明したものが中心である。代表的な研究には、松村（編）（1971）、佐竹（1984）、坪根（1996）、グループ・ジャマシイ（編）（1998）、日本語記述文法研究会（編）（2008）などがある。これらの多くの研究で、「のに」とだいたい同じ意味」「Pには望ましい事態／一般的な事態が示され、Qにはそれが成立しなかったことが表される」「不満足・残念な気持ちを表す」といった共通する説明がなされている。例文を示す。

- (1) 休んでいれば治るものを、医者になんか行ったからかえって長引いて

「ものを」と「のに」の違いについては、佐竹(1984)が(2)の例を示し、「のに」には意外・不合理・不自然といったニュアンスで事態の展開をとらえる側面もあるが、「ものを」にはそのようなニュアンスは見られないと説明している。しかし、この分析はほぼ反事実条件文に接続する「ものを」に対し、事実事態を表す文に接続する「のに」の例を用いており、十分な分析とは言えない。

(2) あまり練習しなかった {のに / *ものを} いい成績だった。(佐竹1984:96)

このように、「ものを」については文脈での用法など、「のに」との違いも含めて十分に記述されているとは言い難く、さらなる研究の余地があると言える。

3 「ものを」の使用文脈の特徴と用法

「ものを」の使用には「PものをQ」のQが出現する場合とQが出現しない場合がある。これらの2つの場合について、「ものを」と同じく反事実条件文に接続する接続助詞「のに」との比較をとおして、使用文脈の特徴と文脈のなかでの用法を分析する。3.1では分析データについて、3.2ではQが出現する場合について、3.3ではQが出現しない場合について述べる。

3.1 分析データ

本研究では用例の分析に『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(国立国語研究所)を用いる。その理由は、「ものを」が話し言葉的ではあるものの、自然会話で用いられることは少なく、小説の会話文や地の文、ウェブテキスト上の文章などで多く用いられると考えられるためである^[註2]。

用例の抽出は検索ツール「中納言」の短単位検索を用いた。「ものを」の検索条件は、キーを語彙素「良い」/品詞「助動詞」/品詞「動詞」、後方共起1語を語彙素「物」、後方共起2語を語彙素「を」とした。また、「のに」の検索

条件は、キーを語彙素「良い」/品詞「助動詞」/品詞「動詞」、後方共起1語を品詞「準体助詞」And語彙素「の」、後方共起2語を品詞「格助詞」And語彙素「に」とした。抽出された例から「Pものを」「Pのに」のPが反事実条件文になっていて、「ものを」「のに」が機能語としての意味を有している例のみを目視で確認した結果、「ものを」は103の用例、「のに」は625の用例を得た。その際、「ものを」が機能語としての意味を有しているとも、実質的な意味を有しているともとれる例は省いている。例えば、(3)では「ものを」を機能語として理解することもできるが、「もの」が「お風呂の蓋」を表しているとも理解できるため分析の対象から外している。

- (3) 築十一年目の我が家、一番に壊れたのはお風呂の蓋でした。(蛇腹のヤツ) 買い換えればいいものを、ずっと辛抱して使っていて、ホームセンターで買い換えたのが昨年夏。(『Yahoo! ブログ』2008年)

3.2 「PものをQ」のQが出現する場合

「Pには望ましい事態／一般的な事態が示され、Qにはそれが成立しなかったことが表される」という先行研究の説明に基づけば、「PものをQ」はPの反事実条件文が表す反事実事態（「～ば／たらいい」「～ば／たらよかった」の形式の場合は「～ば／たら」などの条件節の事態）に対し、Qにはそれと対立する事実事態が表されることになる。そして、不満足・残念などの感情を述べるには、通常、先行文脈にその感情の対象となる事実事態やその事実事態に対する評価などが存在することになる^[註3]。このような、事態という観点から「ものを」の使用文脈の流れを図式化すると図1のようになる。

図1に示した事態間の関係について使用例を見ていくと、先行文脈と「PものをQ」のQには同一の事態や1つの同じ事柄としてまとめられるような複数の連続する事態（以降、まとめて「同一の事態」として扱う）、そして話し手の評価とその評価対象の事態が表されているという特徴を持つことがわかる。そのため、先行文脈と「PものをQ」のつながりという観点からは、「Pものを」の存在が必要な場合もあるが、「Pものを」が存在しなくても先行文脈とQがつながり、文脈の展開が可能な例が多く見られる。

文脈の流れ

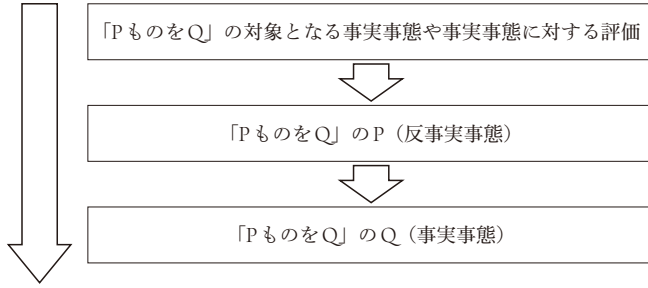


図1 事態という観点からみた「ものを」の使用文脈の流れ

そして、「Pものを」について見ていくと、こうした文脈の流れのなかで先
 行文脈とQの間に挿入され、それらとは対立する反事実事態を表すことから、
 その役割は文脈の流れには大きく影響しない注釈的なもののようにとらえるこ
 とができる。先行研究の指摘を借りれば、Pは望ましい事態／一般的な事態を
 表すわけであるから、「Pものを」の役割は、先行文脈とQで述べている事態
 は本来あるべきPとは異なる、望ましくない事態／一般的ではない事態であ
 る、という話し手の否定的評価を示すために注釈的に挿入されるものと考えら
 れる。

(4) では先行文脈の事実事態「太田は他の人間と一緒にもうけようとする」
 (点線部分)とQの事実事態「(太田は)立身クラブなんかを作った」(波線部分)
 は同一の事態を表し、「Pものを」の「ひとりでひそかにやればよいものを」(実
 線部分)がなくても文脈の展開が可能である。「Pものを」は先行文脈とQで述
 べている事態が本来は考えられない事態であるという話し手の否定的評価を表
 すために注釈的に挿入されている。

(4) しかし、である。それなら太田は、なぜ他の人間と一緒にもうけよう
 とするのだろう。ひとりでひそかにやればよいものを、どうして立身
 クラブなんかを作ったのだろう。 (眉村卓『魔性の町』)

(5) では先行文脈の事実事態「デブ子は夫には何も言わず、延々と揉ませ続ける」(点線部分)とQの事実事態「夫もデブ子がもういいと云うまで延々と付き合い続ける」(波線部分)は同一の事態を表しており、「Pものを」の「(夫も)適当に切り上げればいいものを」(実線部分)がなくても展開が可能である。「Pものを」は先行文脈とQで述べている事態が本来は考えられない事態であるという話し手の否定的評価を示すために注釈的に挿入されている。

(5) デブ子、揉み方が気に入らないとシャクシャク文句垂れるんだが、私
に対しては文句垂れやがるくせに夫には何も言わず、延々と揉ませ続
ける…で、夫も適当に切り上げればいいものを、デブ子がもういい、
と云うまで延々と付き合い続ける… (『Yahoo! ブログ』2008年)

文脈の展開上、先行文脈と「PものをQ」のつながりに「Pものを」の存在が必要な場合とは、Qの表現だけでは先行文脈に表される事態や評価に合った事態を十分に表すことができないために「Pものを」が必要な場合である。このような例はQが先行文脈の具体例を表す場合によく見られる^[註4]。

(6) では先行文脈の「なりゆきでお金を使うことに慣れてしまっている人は意識するとかえってケチになる」(点線部分)に対し、Qの「海外旅行へ行った時などホテルのバスを使った方がトクなどと時間待ちをしたりする」(波線部分)は具体例を表している。しかし、Qだけでは何をするときケチになっているのか、「バスを使う」ことと比較されるものがないとわかりにくいため、「Pものを」の「空港までタクシーを利用すればよいものを」(実線部分)が文脈展開上必要になっている。

(6) しかし、なりゆきでお金を使うことに慣れてしまっている人は、意識
するとかえってケチになるという面白い共通点が見られる。これは、
他ならぬ私自身も体験することで、たとえば海外旅行へ行った時など、
空港までタクシーを利用すればよいものを、ホテルのバスを使った方
がトクなどと、時間待ちをしたりする。

(鴨下一郎『なぜか「人が集まる人」の共通点』)

一方、反事実条件文に接続する「のに」も「ものを」とだいたい同じ意味を表すため、先行文脈とQには同一の事態や評価とその評価対象の事態が表されるという図1と同様の文脈の流れがあるはずである。しかし、使用例を見ていくと、「のに」の場合、Qが先行文脈の事実事態の背景事情となる事態を表す例や、QがPと対立する事態を表さずに先行文脈の事実事態に対する話し手の評価や感情を表す例がある^[注5]。そのため、「Pのに」は「Pものを」ほど注釈的挿入という役割を感じさせない。

(7) ではQの「(購入時に聞くのを) 忘れてしまった」(波線部分)は先行文脈の事実事態「名前が分からない」(点線部分)の原因となった過去の事態を表している。

(7) その花もまた少しづつ大きくなってきて、この秋口になって多くの花を付け出した。名前が分からない。購入時に聞いておけばよかったのに忘れてしまったのだ。
(『Yahoo! ブログ』2008年)

(8) ではQ「ひどい奴だ」(波線部分)はP「俺も一緒につれていってくれる」(実線部分)と対立する事態を表さず、先行文脈の事実事態「本陣の裏の台所で、奴、人足の中にまじって膳にありついた」(点線部分)に対する話し手の評価を表している。

(8) 「北八、お前は俺にかくして、銭を持っとったのか」「なんの、無料でよ」と、本陣の裏の台所で、奴、人足の中にまじって膳にありついたのを話した。「自分一人いい目をみないで、俺も一緒につれていってくればいいのに、ひどい奴だ」
(池田みち子『池田みち子の東海道中膝栗毛』)

以上のように、「PものをQ」は先行文脈とQがつながる文脈のなかで「Pものを」が注釈的に挿入され、先行文脈とQで述べられている事実事態が本来あるべき事態とは異なる、望ましくない事態であるという否定的評価を示すために用いられる。

3.3 「PものをQ」のQが出現しない場合

「PものをQ」のQが出現していない場合、Qは省略されていると考えられる。「Pには望ましい事態／一般的な事態が示され、Qにはそれが成立しなかったことが表される」と先行研究で説明されるように、Pが表出されればQにはどのような内容が表されるか予測可能であるためである。

「Pものを」の役割については、「Pものを」で文が終了するため、Qが出現している場合の注釈的挿入という役割は考えにくくなる。Qを省略することで余韻を残し、聞き手や読み手にQを想像させて話し手の不満足・残念な感情を印象づける効果を高めているように感じられる。

(9) では先行文脈の事実事態「舞を覚えて帰ってきた」(点線部分)に対して「Pものを」の「大人しく隠居してれば良いものを」(実線部分)のみ心内発話され、Qは発話されていない。先行文脈の事実事態とPの反事実条件文から予測されるQの表現は、例えば、(9')の波線部分のような表現が可能である。この場合、先行文脈の事実事態とQの事態は同一の事態を表す。

(9) 呉夫人「ふう、一年ぶりかしら？」呉国太・小喬「げえ！」呉夫人「ん？
どうかしたかい？」小喬「いえ別に…あの～たしか賢母が大戦条約違反で出場停止処分になったんでは？」呉夫人「ああ、だから舞を覚えて帰ってきたわよ！」呉国太「…。」(ちっ、大人しく隠居してれば良いものを。)
(『Yahoo! ブログ』2008年)

(9') 大人しく隠居してれば良いものを {どうしてまた帰ってきたんだ}。

(10) では「Pものを」の対象となる事実事態は先行文脈に言語化されているわけではないが、その会話内容から「一度死刑判決が出た者が弁護士を代え裁判を長引かせている」ことであるとわかる。その事実事態に対して「Pものを」の「ええ加減で諦めりゃええものを」(実線部分)のみ発話され、Qは発話されていない。先行文脈の事実事態とPの反事実条件文から予測されるQの表現は、例えば、(10')の波線部分のような表現が可能である。この場合、先行文脈の事実事態とQの事態は同一の事態を表す。

- (10) 「福岡市の弁護士でしたよね、こんどのは」「小倉から身柄を移したのは、いつか?」「六月十日だったです」「控訴審の初公判が十七日だし、そげん打合せもしょらんごたるな」「土手町の拘置所で、もう死刑囚監房じゃけん、ええ加減で諦めりゃええものを」「いやいや、そこが諦めきれんものよ。(後略) (佐木隆三『復讐するは我にあり』)
- (10') ええ加減で諦めりゃええものを {まだ諦めようとしな^い}。

一方、「のに」の場合、主節Qが出現していないのは事実事態の省略とは考えにくい例が多く存在する。それはQがなくても「Pのに」だけで文が完結しているようにとらえることができる例である^[註6]。

(11) では「Pのに」の「この人が僕の母親だとい^いのに」(実線部分)は実現不可能なことを前提とした願望を表している。「Pのに」だけで完結するような用いられ方であり、Qが省略されているとは考えにくい。仮にQが省略されていたとするとQは(11')の波線部分のような表現が考えられるが、その場合、そのQの事態は、先行文脈の事実事態「彼女は僕にと^とても強い、でもどことなくな^つかしい印象を与える」(点線部分)とは異なるものとなる。

- (11) 彼女は僕にと^とても強い、でもどことなくな^つかしい印象を与える。この人が僕の母親だとい^いのにな、と僕は思う。僕は美しい(あるいは感じのいい) 中年の女の人を目にするたびにそう考えてしまう。

(村上春樹『海辺のカフカ』)

- (11') この人が僕の母親だとい^いのに {どうしてこの人が僕の母親じゃ^ないんだらう。}

(12) では「Pのに」の「持ち込み料をもら^えばいいのに」(実線部分)はアドバイスと理解される発話であり、それだけで完結するような用いられ方であるため、主節が省略されているとは考えにくい。仮にQが省略されていたとするとQは(12')の波線部分のような表現が考えられるが、その場合、そのQの事態は、先行文脈の『『飲み物類の持ち込みどうぞ…』としたり空き瓶、空き缶が大変なことになった』(点線部分)という事実事態と異なるものとなる。

また、アドバイスというよりも非難としてとらえられるものになる。

- (12) さて、『飲み物類の持ち込みどうぞ…』としましたら、空き瓶、空き缶、大変なことになりました。昔、小学一年生の君は「持ち込み料をもらえばいいのに」とアドバイスをくれましたよ。

(神田清剛『「ペンションを継ぐ!」という君へ』)

- (12') 持ち込み料をもらえばいいのに {どうしてももらわないの。}

以上のように、「PものをQ」のQが出現しない場合Qは省略されており、その省略されている内容はPと先行文脈から予測可能である。「Pものを」はQが表出されないため注釈的挿入という用い方にはならないが、省略による不満足・残念な感情を印象づける表現効果を狙ったもののように考えられる。

3.2と3.3での分析結果は、学習者が、「ものを」が文脈においてどのように用いられているかを理解し、「のに」とどういった点で異なるかを理解するのに役立つものとする。

4 「PものをQ」のP、Qの事態の特徴

「PものをQ」のP、Qが表す事態の特徴について、先行研究では「Pには望ましい事態／一般的な事態が示され、Qにはそれが成立しなかったことが表される」とされる。しかし、こうした事態の特徴を学習者がよりよく理解するにはもう少し具体的、または、詳細な記述が必要に思われる。本研究では、Pによく出現している語句を調査し、それをもとに、Pの反事実事態とQの事実事態がそれぞれどのような事態であるかを分析した。

表1はPによく出現している語句とその出現数を表したものである。類義の語句をまとめ、2回以上出現している語句を示している。2回以上の出現の語句の総出現数は53例である。これらにはP内で共起可能な組み合わせがあるためこれらの語句が出現したPの件数を調べたところ103例中52例であった。

Pによく出現している語句としては、肯定の意味の述語と用いられて事実事態より程度の高いことを表す語句と、肯定の意味の述語や否定の意味の述語と

ともに用いられて事実事態より程度の低いことを表す語句が多く出現している。前者の語句には「～くらい（最低限）」「もっと」「早く」などがあり、後者の語句には、肯定の意味の述語とともに用いられる「～まま」「ひっそりと／心静かに／ひそかに／ゆっくり」「適当に／ええ加減に」、否定の意味の述語とともに用いられる「～まで／そんなに」などがある。

表1 「PものをQ」のPによく出現している語句とその出現数

Pによく出現している語句	出現数 (103例中)
～くらい	8
～まま (そのまま／あのまま／～のまま)	8
早く／早いとこ／とっとと／すぐ	6
もっと	6
素直に	5
初めから／最初から	5
～まで (そこまで／女子供まで) /そんなに	5
ひっそりと／心静かに／ひそかに／ゆっくり	5
適当に／ええ加減に	3
せめて	2
合計	53

事実事態より程度が高いことを表す語句がPに出現することによってQの事実事態は行為の程度が不十分であることが非難され、事実事態より程度が低いことを表す語句がPに出現することによってQの事実事態は行為が行き過ぎていることや不要な行為であることが非難されていることがわかる。

(13) ではPに「もっと」(実線部分) が出現しており、Pの「もっと注意すればいい」からは、注意をしていなかったことが非難されているのではなく、注意が不十分であったことが非難されていることがわかる。

(13) それはともかく、ゲンもばかなやつだ。もっと注意すればいいものを、教室の入り口でころんでしまった。紙ぶくろはハンマーを打ちおろすようなはげしさで、コンクリートの床にぶつかったという。

(大原興三郎『おじさんは原始人だった』)

(14) ではPに「そのまま」(実線部) が出現しており、Pの「そのままうまくやればいい」からは、愛人を作ったことが非難されているのではなく、駆け落ちまでするという行き過ぎた行動を非難していることがわかる。

(14) ところが、何不自由ない生活だったのに、〈オバジイ〉は自分の娘ぐらいの女とできてしまった。仕事もサボってばかりになり、愛人の家に入り浸る。そのままうまくやればいいものを、二人で駆け落ちすることを考えた。(見沢知廉『四人狂時代』)

事実事態より程度が高いことを表す語句や事実事態より程度が低いことを表す語句がPに出現していない例においても、行為が不十分であること、行為が行き過ぎていること／不要な行為であることを非難していることがわかる。

(15) ではPの「自然に飼育すればいい」(実線部分) は望ましい事態として特別なことをしないとすることを述べており、Qの「牛の餌に牛の骨を使うという自然の摂理に反することをした」(波線部分) からは行き過ぎた行為を非難していることがわかる。

(15) SARSも狂牛病も鳥インフルエンザも、人間が引き起こしたといっている。狂牛病がいい例です。自然に飼育すればいいものを、牛の餌に牛の骨を使うという自然の摂理に反することをしたがために病気が広まった。(ビートたけし(著)／実著者不明『週刊ポスト』—2004年1月30日号(第36巻第6号、通巻第1738号) —)

(16) ではPの「広い世間をまっすぐ歩めばよい」(実線部分) は望ましい事態として余計な寄り道をしない生き方をするということを述べており、Qの「わざとジグザグ生きて、地獄のそこへ沈んで行く」(波線部分) からは、余計な横道にそれる生き方をしていると非難していることがわかる。

(16) 何不足なく恵まれた家庭に生れ育ち、優しい両親がありながら、ぐれで甘えて身を持ち崩し、広い世間をまっすぐ歩めばよいものを、わざ

とジグザグ生きて、地獄のそこへ沈んで行く馬鹿もいる。

(吉野道男『熱球児—高校球児物語—』)

以上から、「PものをQ」のP、Qが表す事態の特徴について次の(17)のようにまとめることができる。

(17) 【Pの反事実事態】

本来あるべきで、望ましいと話し手が認識する反事実事態を表す。事実事態よりも十分に行われている事態、行き過ぎたこと／不要なことが行われていない事態を表すことが多い。

【Qの事実事態】

本来あるべきでない、望ましくないと話し手が認識する事実事態を表す。十分に行われていない事態、行き過ぎたこと／不要なことが行われている事態を表すことが多い。

この分析結果は、どのような事態を言い表すときに「ものを」を用いるかという学習者の産出にも寄与する有用な情報となるだろう。

5 まとめ

本研究では反事実条件文に接続する接続助詞「ものを」について、日本語教育に還元できる従来よりも明解な説明を目指し、文脈においてどのように用いられるか、そして、どのような事態を表すかといった特徴の分析を行った。文脈における用法についての分析結果は(18)、事態の特徴についての分析結果は(19)のとおりである。

(18) 【「PものをQ」のQが出現する場合】

先行文脈とQがつながる文脈のなかで「Pものを」が注釈的に挿入され、先行文脈とQで述べられている事実事態が本来あるべき事態とは異なる、望ましくない事態であるという否定的評価を示すために用い

られる。

【「PものをQ」のQが出現する場合】

Qは省略されており、どのような内容が省略されているかはPと先行文脈から予測可能である。「Pものを」は注釈的挿入という用い方にはならず、不満足・残念な感情を印象づける表現効果を持つ。

(19) 【Pの反事実事態】

本来あるべきで、望ましいと話し手が認識する反事実事態を表す。事実事態よりも十分に行われている事態、行き過ぎたこと／不要なことが行われていない事態を表すことが多い。

【Pの反事実事態と対立する事実事態】

本来あるべきでない、望ましくないと話し手が認識する事実事態を表す。十分に行われていない事態、行き過ぎたこと／不要なことが行われている事態を表すことが多い。

これらの分析結果は学習者の「ものを」の理解に貢献できるものと考え、日本語教育での導入において、学習者の「ものを」の産出という点に主眼を置いた場合、これらの分析結果のうち(19)がより有用な情報となるだろう。PとQの対立内容についての従来よりも詳細なこの記述により、学習者はどのようなことを言い表したいときに「のに」ではなく「ものを」を用いるのかということをイメージしやすくなると思われる。 (神戸医療未来大学)

付記

本稿は、科研費(20K13094)による助成を受けた研究成果の一部です。

注

[注1] …… 本研究で反事実条件文に接続する「ものを」を対象とするのは、「ものを」が「反事実条件文、あるいはそれに類するものがきて」(日本語記述文法研究会(編)2008:161)とされるように、ほぼ反事実条件文に接続する形式と考えられるためである。

- [注2] …… サブコーパスについては出版・図書館・特定目的のすべてを検索対象とし、レジスターも特定のものに限定していない。本研究の目的が「ものを」の使用全体に現れる特徴を分析するものだからである。
- [注3] …… 「PものをQ」が表す不満足・残念などの感情の対象となる事態が先行文脈に存在しない例もわずかではあるが存在する。下の(ア)の実線部分「こんな時くらいゆっくり話せばいいものを」は直前の「それにしても」からわかるように先行文脈の会話文の内容とは関係ないものであり、対象となる事態は先行文脈に存在しない。
- (ア)「先程静岡県本部の捜査員が来て事情を聴取して行った。(中略)柴田勇治氏から要請があった。私が行きたいところだが弁護士が被疑者と親しいと云う事実は後後不利だから」起訴される——と云う口振りである。関口は誤認逮捕ではないと云うことか。それにしてもこんな時くらいゆっくり話せばいいものを——と青木は思った。
- (京極夏彦『塗仏の宴』)
- [注4] …… 先行文脈の事実事態に対しQがその具体例を表す場合、それらは同一の事態というとらえかたが可能であると考えられる。
- [注5] …… 白川(2009:182)では、「のに」の使用には、主節のあるなしにかかわらず、先行文脈の事態との関係づけの用法があり、主節の事態は「Pのに」と関係づけられる先行文脈の事態と異なる場合があると述べ、次の(イ)の例を挙げている。主節「まいっちゃう」が先行文脈の事態「毎日家庭教師に行かなければならない」と異なっているという指摘である。
- (イ)「今夜も家庭教師？」
- 「生徒の高校受験が近づいててさ、追い込み。毎日来てくれて言うんだもん。私だってさ、試験もうすぐだっていうのに、まいっちゃう」
- (白川2009(34)一部省略、橋田壽賀子『渡る世間は鬼ばかりPart1』p.126)
- これは前件が事実事態である「のに」についての記述ではあるが、この特徴が反事実条件文に接続する「のに」についても当てはまるものと考えられる。
- [注6] …… 前田(2009:208-209)では「のに」の後件は省略されるとしているが、省略された後件が文脈からも探すのが困難で、終助詞としての機能が全面に出る場合があると述べている。また、白川(2009:182-183)も主節の事態は「Pのに」と関係づけられる先行文脈の事態と異なる場合があることから、「のに」の主節の事態は省略されているという立場をとっていない。これらの記述も前件が事実事態の「のに」についてのものではあるが、反事実条件文に接続する「のに」についても同様のことが言えるものと考えられる。

参考文献

- グループ・ジャマシイ(編)(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 佐竹久仁子(1984)「～もので～もの／～ものを」『日本語学』3(10),pp.89-96. 明治書院

- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』 くろしお出版
- 坪根由香里 (1996) 「終助詞・接続助詞としての「もの」の意味―「もの」「ものなら」「ものの」「ものを」』 『日本語教育』 91, pp.37-48.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2008) 『現代日本語文法6 第11部 複文』 くろしお出版
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文―条件文と原因・理由文の記述的研究』 くろしお出版
- 松村明 (編) (1971) 『日本文法大辞典』 明治書院
-

分析資料

- 国立国語研究所 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (中納言2.4.5 データバージョン 2021.03)』
-